

高校階層構造の変容

高校生文化と進路形成の変容東京調査

○樋田 大二郎	聖心女子大学	大多和直樹	東京大学
○岩木 秀夫	日本女子大学	金子 真理子	東京学芸大学
耳塚 寛明	お茶の水女子大学	堀 健志	日本学術振興会特別研究員
荻谷 剛彦	東京大学	荒川 葉	日本学術振興会奨励研究員

高校階層構造は、高校生の社会化と社会的配分を規定するものであり、これまで、「普商工農」構造や「輪切り」構造などの弊害が指摘されてきた。しかしながら、私たちの昨年度の本学会報告で明らかになったように、高校を取り巻く環境の変化や高校教育改革の進展の結果、一部のエリート校が存続しているものの、それ以下のランク高校とくに中位・下位の高校では輪切り選抜の状態にはなっておらず、また、必ずしも「普商工農」構造にはなっていない。

本報告では、2000年度に東京都の高校を対象に行った生徒対象質問紙調査と文書調査の結果を中心に、高校階層構造の変容とそれらが高校生文化と進路形成の変容に与えた影響を検討する。

1. 研究の経緯と本報告の課題

A. これまでの調査

私たちは、1979年以降4次にわたり3つの都県を対象に高校生文化と進路形成の変容について調査を行ってきた。調査は①文書蒐集と聞き取りによる学校経営・組織調査、②教員集団の対生徒パースペクティブを扱った教員対象の質問紙調査、③生徒対象の質問紙調査から構成されてきた。

1)「79年調査」：1979年度に第1次調査として東京都および地方の2県の公立高校を対象に『トラッキング』の観点から「高校生の生徒文化と学校経営」調査を実施した。

2)「97年経年調査」：次いで第2次調査としておよそ20年後の1997年度に地方の高校を対象に高校教育変動の探求を目的に「高校生文化と進路形成の変容—1979年調査との比較によるトラッキングの弛緩を中心に」調査を実施した。

3)「99年拡大調査」：上記2つの調査で浮かび上がった高校階層構造の解明をインテンシブに行うために、第3次調査として1999年度に調査方法は同じ対象校を拡大した補充調査を実施した。

4)「2000年東京調査」：そして、2000年度に東京都の高校を対象に、第1次調査との時系列比較および第2次・第3次調査との地域比較の観点から調査を実施した。

B. これまでの知見

79年調査当時は、その後の高校を取り巻く環境の急激で大規模な変化を迎える前の時代であった。当時の問題関心は、①いわゆる高等学校の学校格差（高校のランク・タイプ）に応じて形成される高校生文化の生態、②そこでの生徒の進路形成のメカニズム、③それらを生み出す学校組織・指導体制など多岐にわたっている。これらを通して私たちが明らかにしたのは、トラッキング的な高校生文化と進路形成のメカニズム、すなわち「中学時代の成績に応じたランクの高校に進学し、ランクに応じた高校生活を送り、そしてランクに応じて進路選択が枠づけられる」トラッキングのメカニズムだった。

1979年以降、高校教育をめぐる大規模な変動が生じた。個性化・多様化を中心とする教育理念の浸透、少子化等による高等教育進学をめぐる状

況の変化や高卒労働市場の変貌、消費社会化の進行による高校生の生活や意識の変質などである。この間文部省も1984年～1987年まで開かれた臨時教育審議会、1989年の高校学習指導要領第6次改訂、1991年高校教育改革会議発足などを経て、個性重視・ゆとり・生きる力・新学力観などとさまざまな政策を実行した。こうした変動の中で行われた97年経年調査では、まずは地方の2県で79年調査と同一対象校に対して79年調査と同一方法で調査を実施して高校教育の変動をとらえた。97年経年調査の知見は次の通りである。①わが国では、高校教育の進学準備教育への大規模なシフトが生起する中で高校の階層構造そのものは維持されていた。②高校の指導は、就職指導と校則指導からの撤退および学習指導と受験指導の強化という指導の特化が起きた。③学習指導と受験指導は、進学先や受験の方法（一般受験か学力推薦かスポーツ推薦か）の違いに応じて、高校ランクと対応して異なっていた。④生徒質問紙調査から生徒の意識と行動を見ると、生徒の学習時間は減少し、勉強からの疎外、現状維持志向、成績アイデンティティ（学業成績に基づいたアイデンティティの確立）の希薄化といった傾向も現れている。⑤以上①～④のことがらは、全体としての高校生活の比重の低下、社会階層の影響力の顕在化などの傾向をとまっていた。

99年拡大調査は、97年経年調査の2つの県のそれぞれ1地区に焦点を当て、地域のほぼ全ての高校階層を網羅するサンプリングを行った。その結果、①多数を占める中下位層の学校では入学者の学力にいわゆる「輪切り」状態がみられない。②80年代以降の高校多様化政策の中で、とくに中下位層の学校のカリキュラムが多様で選択的なものになってきている。③「楽しい授業」「多様な能力をのばす」などの教育観が中下位校の教師に浸透している。④中下位校では生徒の消費文化へのコミットメントが学校を楽しいものにする一方で、「あくせく勉強して良い大学や良い会社へ入っても、将来の生活に大した変わりはない」という意識を強めている。⑤低い社会階層出身者や中下位校の生徒の間で、「あくせく勉強して……大した変わりはない」という意識が自尊心を高め、自尊心の高いことが学習時間を減らし、将来の教育アスピレーションを低める方向に作用している、などのことが明らかになった。

2. 調査の概要

前回とほぼ同じ内容の聞き取り調査と生徒・教師対象質問紙調査をそれぞれ実施した。なお、97年経年調査を実施した高校は新たに調査を実施せず、97年経年調査のデータを分析に用いている。

1) 分析対象校・生徒

都内A学区の都立普通科高校8校とこの地域に住む中学生が通うことができると思われる都立専門学科高校2校と新タイプの高校8校（受験地域の制限はない）、および国立・私立高校15校。

これらの高校は、入学者の中学卒業時成績平均から、SUPER校(10以上)、上位校(8以上)、中位A校(6以上)、中位B校(5以上)、下位校(それ以下)の5つに分けられた。

※調査対象校のプロフィールは当日報告する。

2) 調査対象者および調査内容

生徒対象質問紙調査は、各校高校2年生に対して2001年1~3月に実施。

※なお、97年調査では近年の変化を念頭に置いて79年調査に質問の追加・修正を行っている。さらに、2001年調査では東京都の状況に合わせて質問の追加・修正を行っている。

調査対象となった生徒は、表1の通りである

3. その他

1) 詳細なデータ、参考・引用文献は、当日配布する。

2) 本研究の教育社会学会での報告は、本報告と次の報告とに分けて行っている。大多和直樹・「消費都市における生徒文化—高校生文化と進路形成

の変容東京調査(V-3部会)」、荒川葉「高校生の職業選好と進路選択—高校生文化と進路形成の変容東京調査(IV-1部会)」もあわせてご検討いただきたい。

3) 本調査は、文部省科学研究費の助成を受けて実施した。<平成11年度・12年度・13年度科学研究費基盤研究(B)(1)「高校生文化と進路形成の変容—大都市圏高校教育の変容を中心に—」(代表:樋田大二郎)>

※分析対象者票数その他分析サンプルについては当日報告する。

表1. 調査対象生徒

	国・私立 女子	国・私立 男子	都立 女子	都立 男子	無答・ 不明	全体
Super	111	283			3	397
上位校			317	192	5	514
中位A	127	285	361	197	13	983
中位B	551	179	241	184	15	1170
下位校	498	348	213	171	11	1241
	1287	1095	1132	744	47	4305

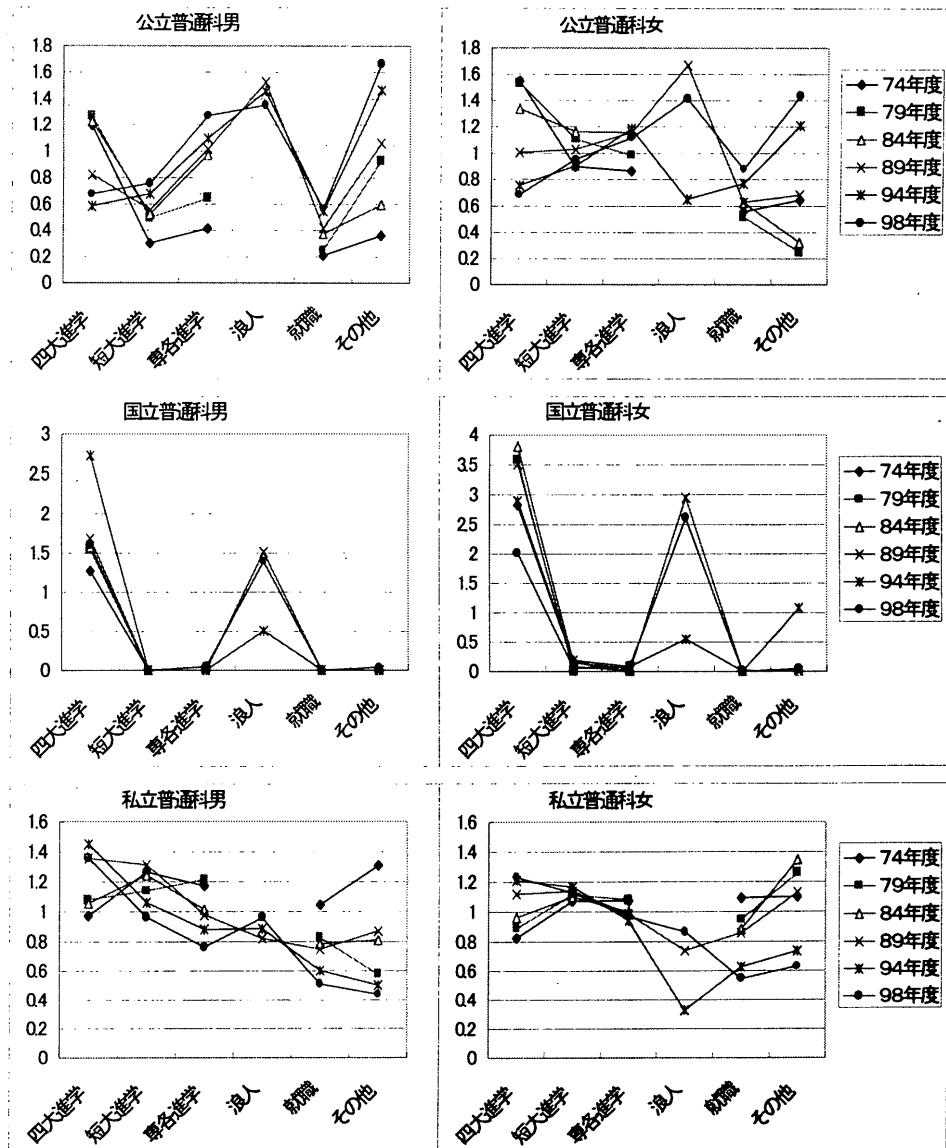
3. 進路形成機能の国公私比較

1) 概況

リクルート社『高校 高校総覧』の'74,'79,'84,'89,'94,'98年度データを用いて、進路形成における国立、立、公立、私立高校の位置関係の変化をみとめる。公立(専門、普通)、国立(専門、普通)、私立(専門、普通)の6カテゴリーを縦軸、四大学進学、短大学進学、専各進学、浪人、就職、その他の6カテゴリー(ただし「浪人」の掲載は'89年度から)を横軸とするクロス表から観測値と期待値の比率 f_{ij}/e_{ij} (ただし期待値 $e_{ij} = n_{i.} \times n_{.j}/N$) を計算した結果が右の図である。

グラフの左肩上がりのパターンが進学機能の競争力を表している。その観点で図を見ると、①国立が進学機能の点で'74年時点から図抜けている、②公立の競争力は'74年度から'84年度までは私立よりも上回っていたが、それから'89年までの5年間に私立と逆転して劣位になった、③公立

表2. 年度別設置者別進路希望

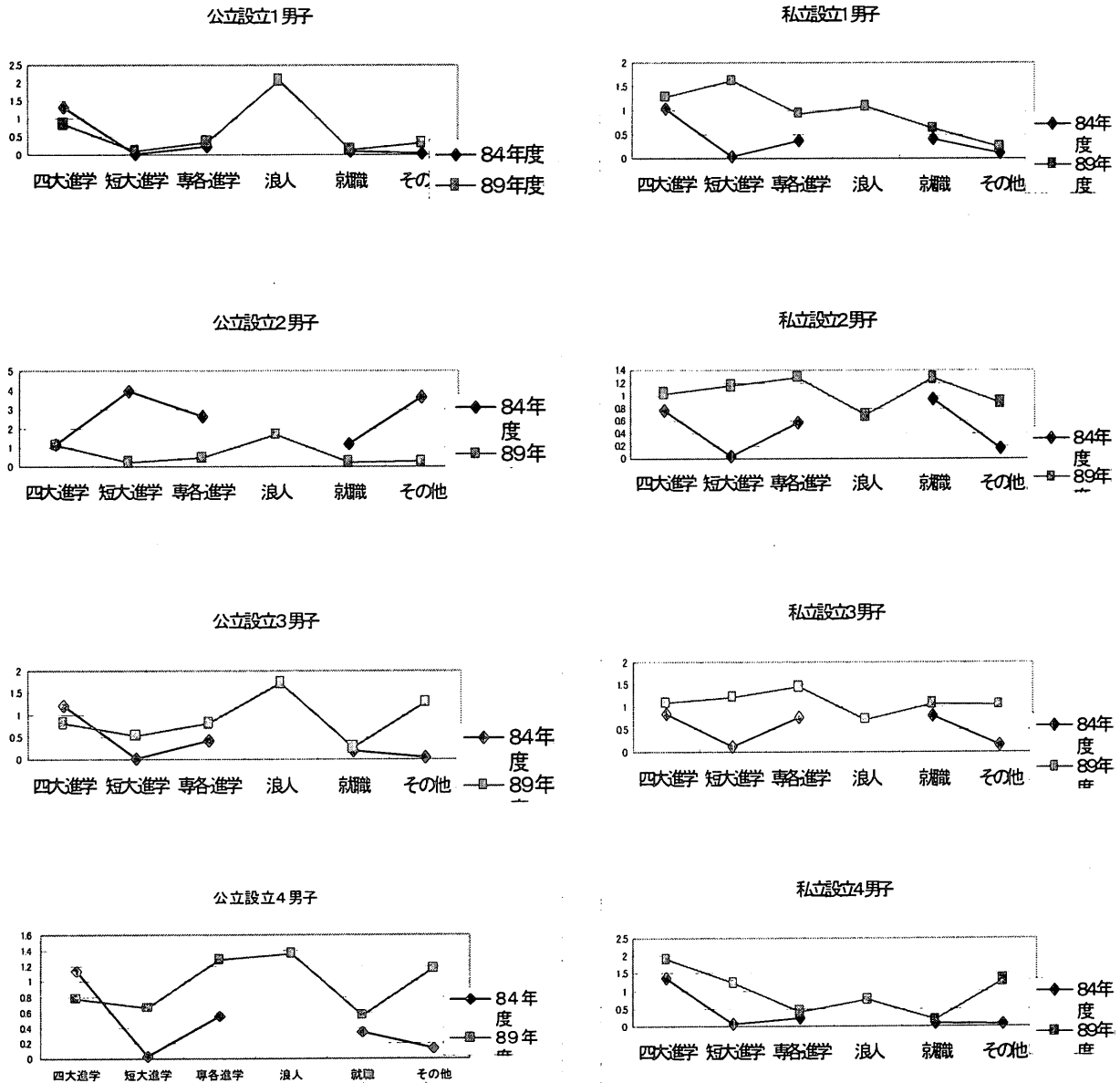


卒業者の進路は'98年度の時点では「その他（進路未定者）」が国立や私立よりも顕著に多い、などのことがみてとれる。

2) 学校設立年別の公私比較

'84年度から'89年度のあいだの公立と私立の逆転がどの学校で起こったかを、設立年別に確かめたのが次の図である。男女ともに、'84年度から'89年度にかけての公私逆転の主役となったのは、設立年度が最も古い類型と最も新しいタイプの私立校だったといえる。

表3. 設立年度×年度別にみた公・私別進路希望



4. 高校の階層構造（ランク）と生徒のグループ化

高校教育は、日本の産業が第2次産業中心であった時代の画一的で効率的で勤勉さを求める教育から、第3次産業中心の情報化社会・感性消費的社會への移行に伴って、個性や感性、内面をも教育のターゲットにしたものになりつつある。これは、労働者養成と消費者養成の2つの点から検討されるべきことであるが、ここでは詳細は省く。そうした中で、高校階層構造は成績という外的基準によって一元的に測定された能力をもとに生徒をグループ化するための「輪切り選抜の階層」構造から、興味・関心等の生徒の内面をも取り組

んで生徒を教育の対象にするための、「選択の余地のある」構造へと変わりつつある。学校ランク別に見た高校の階層構造を見ると表4以下のような特徴を示している。

①高校の階層構造についてみると、生徒は中学時代の成績に応じたランクの高校に進学しているが、成績とランクの対応がタイトな「輪切り選抜構造」になっているとは言えない（表4）。

1) 学校ランクと相関の強いもの
 ②しかし、「輪切り選抜構造」が緩やかなものであるとはいえ、高校のランクと生徒の生活の間には相関があり、SUPER校では塾通いが多く、

上位校では部活動が多く、中位校以下では街でぶらつくことが多い(表5)。

③さらに、学校ランクと家庭的背景との間にも相関があり、学校ランクが高いほど親の職業階層が高く、また学歴も高い(表6)。

2) 学校ランクとの相関が弱いもの

④学校選択の際に重視したことを見ると、学校ランクとの相関が弱くなる。自分の成績を重視した生徒の割合が最も高いのは SUPER 校ではなく上位校であり、2番目に高い割合だったのは中位A校であった。また、教育面での特色を重視した生徒の割合が最も高いのも上位校であった。また、中位B校の生徒の方が下位校よりも進学や就職の

実績を重視していた(表7)。ランクと対応した「輪切り選抜」が行われているだけでなく、生徒によるランクとの対応の弱い「学校選抜」が行われている。

⑤生徒に学校経営について評価を求めた結果でも学校ランクとの相関が低い。SUPER 校ではなく上位校(すべて都立)で各経営項目の評価が高い。また、受験指導をしているとする生徒の割合が SUPER 校と下位校で同じように低かったり、能力・適性別クラス編成をしているとする割合が最も高いのが中位B校あたりするなどしている(表8)。

※なお、当日の報告では、学校ごと学科ごとの分析も行う。

表4. 中学卒業時成績別に見た進学先高校のランク(公立中学: 対100%)

	1下位	2	3	4	5中位	6	7	8	9上位
1. Super	0.6	0.4			0.5	0.6	1.3	2.5	15.8
2. 上位校	3.2	1.8	1.6	1.4	2.9	7.3	18.6	45.7	65.0
3. 中位A	5.2	5.3	6.5	11.8	15.6	38.3	53.4	41.0	16.1
4. 中位B	9.7	16.0	25.4	38.4	50.9	38.9	16.0	5.1	0.3
5. 下位校	81.3	76.4	66.5	48.3	30.1	14.9	10.8	5.7	2.9

表5. 学校ランク別に見た放課後の過ごし方(3日以上)

	塾予備校	部活動	街をぶらつく
1. Super	45.9	29.1	15.6
2. 上位校	15.5	55.0	14.6
3. 中位A	13.4	35.5	21.5
4. 中位B	12.2	32.4	25.9
5. 下位校	3.1	25.2	35.1

表6. 学校別に見た家族属性

	A. 父職		B. 大卒	
	専門・管理・技術	それ以外	父親	母親
1. Super	76.1	20.4	86.6	60.1
2. 上位校	53.1	42.0	71.1	35.2
3. 中位A	52.0	41.1	65.6	36.5
4. 中位B	45.4	46.8	52.3	27.4
5. 下位校	34.6	55.0	33.9	19.8

表7. 学校選択時に重視したこと

	自分の成績	自分の興味関心	教育面での特色	進学や就職の実績
Super	70.5	41.6	55.8	56.1
上位校	82.6	73.9	68.8	45.3
中位A	69.8	52.4	45.7	32.6
中位B	67.5	43.5	39.0	23.0
下位校	64.3	43.1	37.4	33.2

表8. 生徒による学校経営評価

	SUPER	上位	中位A	中位B	下位
部活動に力を入れている	26.7	64.3	31.6	39.0	39.3
校則を守らせることに力を入れている	31.2	18.7	38.1	38.5	47.0
教科の指導に力を入れている	53.6	60.7	44.3	35.2	32.9
受験指導に力を入れている	40.3	56.3	47.9	43.9	40.9
就職指導に力を入れている	3.3	5.3	26.1	18.2	42.3
選択科目が多い	45.1	70.8	61.6	56.3	42.1
実技、実習、実験が多い	51.7	53.1	41.6	33.6	37.0
全体の授業時間数が多い	42.1	70.2	53.8	53.1	45.5
能力・適性別クラス編成をしている	21.5	38.3	40.1	48.3	41.4
特色あるコースや学科がある	18.2	44.5	42.0	49.0	58.3
生徒の興味・関心に応じた指導に力を入れている	29.1	36.5	29.5	22.8	24.2